

中国貴州省西南部の苗 (ミャオ) 族と布依 (プイ) 族の食文化 (第1報)

— 自然環境 —

八田 耕吉・孫 漢董*・謝 立山*

Dietary Culture of the Miao and Bouyei Tribes in South-Western Guizhou Province of P. R. China (I)

— Natural Environments —

Koukichi HATTA, HAN-DONG Sun and Li-Shan XIE

はじめに

日本における諸文化の研究において、日本文化の起源に照葉樹林文化圏という考え方がでひさしい。すなわち「食」の分野においても、この地域は米、粟、稗などの栽培植物の起源や、日本の伝統的な食品である茶、納豆、豆腐、コンニャクなどの加工食品のルーツともいわれている。

本調査は照葉樹林文化圏において、調査研究が比較的なされていないと思われる中国の西南部に残されている伝統的食品や食事に焦点を当てた。調査は1991年に二度にわたる予備調査の結果、貴州省の中でも東の地域はいくつかの報告があるにも関わらず、西の地域は不便なためかほとんど報告を聞かない黔西南布依族苗族自治州(Qianxinan Bouyeizu Miao Zuzhizhou)を選んだ。しかし、この地域も1997年には雲南省の昆明より鉄道(南昆鉄路)がひかれ、テレビの普及など新しい文化が次々と入ってきており、伝統的な食品にかわつて便利な、そして手軽な食事形態が浸透してくると思われる。調査はこの地域に多い布依族と苗族を対象に、中国科学院昆明植物研究所の協力のもとに行った。

本研究は生活科学研究所の機関研究の一環として、「中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化」を考察する上に重要な背景としての自然環境について、調査期間中に行なった調査である。

調査方法及び調査地概況

調査地域は中国西南部の内陸部に位置する雲貴(うんき)高原の東部に位置し、貴州高原と呼ばれる標高227mから2,207mの熱帯山地性高原にある。調査地域である黔(けん)西南布依(プイ)族苗(ミャオ)族自治州は貴州省の西南端に位置し、南は廣西(こうせい)壮(チワン)族自治区に、西は雲南省に接している。位置は北緯25度、東経105度にある(図1)。

自治州は1982年に1市(興義 Xingyi)、7県(興仁 Xingren、貞豊 Zhenfeng、安龍 Anlong、册亨 Cehengなど)に分離した。全州の人口は256.4万人と名古屋市(210万人)より少し多く、内男性130.1万人、女性126.3万人である。面積は16,790km²あり、愛知県のほぼ3倍にあたる。

* 中国科学院昆明植物研究所; Kunming Institute of Botany, The Chinese Academy of Sciences

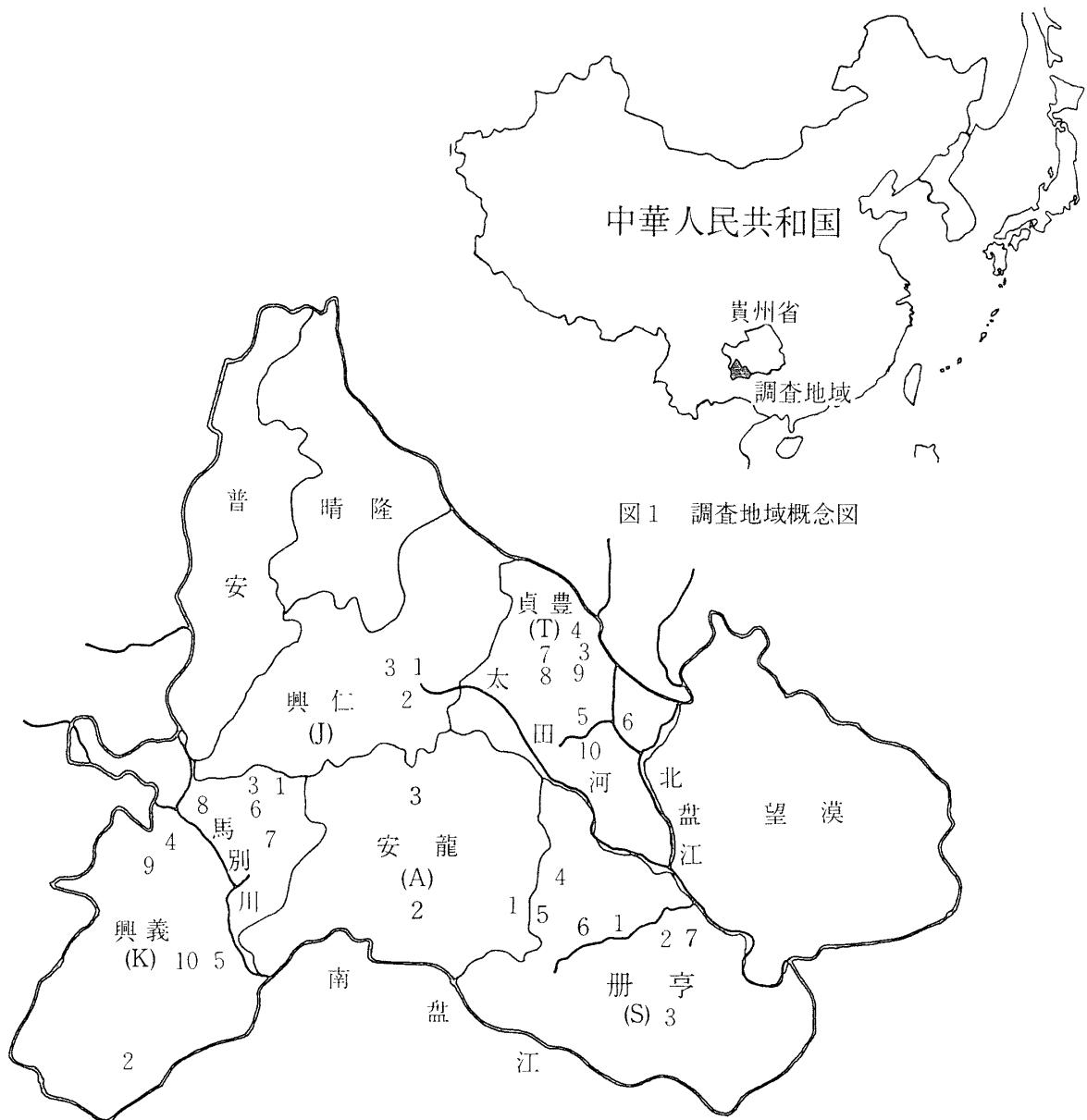


図1 調査地域概念図

図2 調査地概況図 (黔西南布依族苗族自治州)

中国の人口密度が116人/km² (日本333) に対して福島県と同じ152人/km²と世界人口密度 (38人/km²) の約4倍になる。一般的な中国における城市 (都市) 人口密度が1,000人/km²以上 (愛知県1,265) といわれているように都市集中型であるため、平均的 (中国県人口密度100-200人/km²) と思われる。出生率14.0% (千分率) (全中国20.8%, 日本10.1%), 死亡率5.7% (同6.5, 6.4), 人口自然増率は8.3% (同14.3, 3.7) である。

貴州省全体で人口3,271万人のうち、少数民族は約1/3の1,124万人いる。苗族の居住地は湖北省から湖南省, 貴州省, 四川省, 雲南省, ベトナム, ラオスマで広く分散しており, その約半数の370万人 (貴州省人口の11.4%にあたる) が貴州省にすんでいる。布依族は貴州省のいくつかの自治州及び自治県に, 約254万人のうちほとんどにあたる約248万人 (同7.7%) が住んでおり, そのうちの約75万人が調査地域である自治州にすんでいる。同自治州 (自治州全人口256万人) では苗族7.2%, 布依族が29.5%と布依族の方が多い。特に册亨県と貞豊県で

は73.2%、40.3%と布依族が非常に多く、苗族はそれぞれ4.2%と7.3%を占めている。なお册亨県と望漠県では漢族が約22%と少数派である（表1）。

各民族の特徴は苗族は朝廷の権力に対して抵抗し、弾圧された長い歴史があり、山地に追われ分散したといわれている。布依族は同自治州の南側に流れる南盤江の対岸にある廣西壮族自治区にいる壮族と源流を一にしている。すなわち苗族は山に、布依族は川筋に、漢族は道筋にといわれ、焼き畑中心の生活をしてきた。

調査は図2に示した37箇所の村で行い、各村でそれぞれ2世帯を対象に行った食生活の調査と同行して、周囲の環境の観察と聞き取りにより行った。調査日と調査地については下記に示した。第2報以降にでてくる世帯番号はこの通し番号を当てる。

表1 調査地域の人口と人口比率（1992貴州統計年鑑より）

	興義市	興仁県	貞豊県	册亨県	安龍県	自治州
人口(千人)	605	383	248	186	366	2,564
農業人口(%)	89.3	94.1	94.1	94.9	93.2	92.8
漢族(%)	81.6	77.8	51.4	22.2	55.3	59.7
布依族(%)	15.5	11.6	40.3	73.2	34.3	29.5
苗族(%)	0.8	5.1	7.3	4.2	7.4	7.2
その他※(%)	2.1	5.5	1.0	0.4	3.0	2.3

※彝(イ)族, 回(カイ)族, 仡佬(コーラオ)族, 土家(トウチャ)族, 侗(トン)族, 水(スイ)族, 白(ペイ)族

調査日程

第一回予備調査 (1991年夏期)

番号	調査日	調査地	民族	標高
K7	8月23日	興義市頂效鎮馬別村馬別寨	布依族	1,200m
	8月23日	興義市下午藤鎮魚龍村上魚龍寨	布依族	1,100m
	8月24日	興義市巴結鎮梅家弯村中寨	苗族	940m
	8月25日	興義市万屯鎮阿紅村阿紅寨	苗族	1,400m
K1	8月25日	興義市万屯鎮阿紅村杉脚寨	苗族	1,450m
T7	8月26日	貞豊県者相鎮三岔河村三岔河寨	布依族	1,000m
	8月27日	貞豊県珉谷鎮左旗村左旗寨	苗族	1,000m
T9	8月28日	貞豊県珉谷鎮大碑村納馬寨	苗族	1,000m

第二回予備調査 (1991年秋期)

K2	10月4日	興義市巴結鎮南龍村南龍寨	布依族	650m
	10月5日	興義市倉更鎮平岸村平岸寨	布依族	650m
	10月6日	興義市頂效鎮那疊村那疊寨	苗族	1,000m
K4	10月6日	興義市馬嶺鎮坪寨村下瓦夏寨	布依族	800m
	10月7日	興義市坪東鎮坡貢村坡貢寨子	布依族	1,300m
	10月7日	興義市下午屯鎮魚龍村上魚龍寨	布依族	1,100m

第一回調査 (1992年春期)

K1	3月24日	興義市万屯鎮阿紅村杉脚寨	苗族	1,450m
K2	3月25日	興義市倉更鎮平岸村平岸寨	布依族	650m
K3	3月27日	興義市頂效鎮緑化村緑化寨	布依族	1,350m
T1	3月28日	貞豊県挽瀾郷格猫村上格猫寨	苗族	880m
T2	3月29日	貞豊県挽瀾郷坂梁村坂梁寨	布依族	880m
T3	3月30日	貞豊県者相鎮新寨村新寨寨子	苗族	1,100m
T4	3月31日	貞豊県者相鎮新寨村平寨寨子	布依族	1,100m
T5	4月1日	貞豊県者相鎮岩魚村納蟬寨	布依族	980m
J1	4月2日	興仁県巴鈴鎮白泥村白泥寨	苗族	1,240m
J2	4月3日	興仁県屯脚鎮鯉魚村鯉魚坝寨	苗族	1,200m

第二回調査 (1992年夏期)

K4	7月17日	興義市馬嶺鎮坪寨村下瓦戛寨	布依族	1,000m
K5	7月18日	興義市則戒鄉坪寨村上坪寨子	布依族	1,140m
K6	7月20日	興義市頂效鎮綠蔭村謝納寨	苗族	1,250m
K3	7月21日	興義市頂效鎮綠化村綠化寨	布依族	1,350m
T6	7月23日	貞豊県白層鎮毛安村毛安寨子	布依族	450m
T3	7月24日	貞豊県者相鎮新寨村新寨寨子	苗族	1,100m
T7	7月24日	貞豊県者相鎮三岔河村三岔河寨子	布依族	1,000m
T8	7月25日	貞豊県珉谷鎮大碑村楊家山寨	苗族	1,000m
T9	7月26日	貞豊県珉谷鎮大碑村納馬寨	苗族	1,000m
T10	7月26日	貞豊県興北鎮象鼻嶺寨上寨寨子	漢族	1,140m
T3	7月27日	興仁県李闊郷李闊寨子	布依族	1,250m
T1	7月28日	興仁県巴鈴鎮白泥村白泥寨	苗族	1,240m
	7月28日	興仁県槽楚菅郷三家寨村三家寨寨子	回族	1,500m

第三回調査 (1993年冬期)

K1	1月17日	興義市万屯鎮阿紅村杉脚寨	苗族	1,450m
K7	1月18日	興義市馬嶺鎮馬別村馬別寨	布依族	1,200m
K5	1月19日	興義市則戒鄉坪寨村上坪寨子	布依族	1,140m
T9	1月20日	貞豊県珉谷鎮大碑村納馬寨	苗族	1,000m
T6	1月21日	貞豊県白層鎮毛安村毛安寨	布依族	450m
T5	1月22日	貞豊県珉谷鎮岩魚村納蟬寨	布依族	980m
T3	1月23日	貞豊県者相鎮納窩新寨	苗族	1,100m
K8	1月25日	興義市馬嶺鎮光明村阿白寨	漢族	1,200m

第四回調査 (1993年夏期)

A1	7月13日	安龍県平樂郷大寨村大寨寨子	布依族	1,350m
S1	7月14日	册亨県者楼鎮納福村石頭寨	布依族	750m
S2	7月15日	册亨県者楼鎮花冗村羊腸寨	布依族	580m
S3	7月16日	册亨県秋坎鎮板用村大板用寨	布依族	950m
S4	7月17日	册亨県威旁郷大寨村大寨寨子	布依族	1,200m
T3	7月18日	貞豊県者相鎮納窩村新寨	苗族	1,100m
K9	7月22日	興義市坪東鎮那年村阿扯寨	布依族	1,250m
K6	7月23日	興義市頂效鎮綠蔭村謝納寨	苗族	1,250m
K10	7月24日	興義市下午屯鎮納灰村中寨	布依族	1,140m

第五回調査 (1993年冬期)

K3	12月29日	興義市頂效鎮綠化村綠化寨	布依族	1,350m
K4	12月30日	興義市馬嶺鎮坪寨村下瓦戛寨	布依族	1,000m
K11	12月31日	興義市巴結鎮中心村四組寨	布依族	650m
A2	1月2日	安龍県木咱鎮坝力村新寨	苗族	1,250m
A3	1月3日	安龍県龍塘鎮納力村新寨	苗族	1,250m
S5	1月4日	册亨県威旁郷威旁村王家寨	布依族	1,300m
S6	1月5日	册亨県者楼鎮納福村納福寨	布依族	650m
S7	1月6日	册亨県花冗郷弄座村弄座寨	布依族	500m

結果及び考察**気候**

気候は貴州・雲南両省の境界に発生する雲南気候前線—昆明準停滞前線の東側に位置しているため、湿季(5~10月)、乾季(11~4月)ともに降雨日(日降水量0.1mm以上)の占める割合が高く、年間の降雨日数は213日(名古屋104日)である。とくに冬季は長雨が続き、“空は三日つづいて晴れること無し”のたとえどおり、冬季(12月~2月)の年間降雨日数に占める割合は44%(名古屋16%)と多い。雨期・乾期の区別がないように思われるが、冬の日降水量は非常に少なく、“こぬか雨”と呼ばれる霧雨がつづき、1月の降水量も16.5mmと少ない。年降水量は調査地のひとつ興仁では1,300mm(名古屋1,535mm)ある中で、7月の降水量が235mm

と多く、年降水量百分率も湿季83.3%と夏季に集中している。さらに日照時間がわずかに1,505時間（名古屋2,015時間）しかなく、年平均相対湿度も83%（名古屋69%）と非常に高く、いつもジメジメしている。夏季（7月、8月）の調査時も日中は雨の日が少なかったが、夜中に雷雨が何度かあり、道路の決壊など移動がしばしば困難であった。冬季（1月）の調査期間中も曇天に霧雨がときどきある程度で傘をさす日はなかったが、家庭でたかれる石炭や練炭の燃焼により起きるスモッグのため1日中どんよりとしている。そのうえ湿度が高いため、いつの時期にも濡れた衣服や洗濯ものが乾かなかった。

調査地の北に位置する貴陽での1月の平均気温は5.3℃、7月には25.0℃以下と年較差は20℃を越えない（名古屋1月平均気温3.6℃、7月26.8℃、年較差23.2℃）。冬は季節風もなく厳冬にならないが、湿度が高く肌寒く感じる。1月の調査期間中の最低気温は3℃から6℃、最高気温は12～13℃、日が照ると18℃まで上昇した。湿度は63～83%であった。また夏には酷暑にはならないが、最高気温が30℃を越える日が少ないわりには日較差が少ない。7月の調査時における最低気温は20℃、最高気温は31℃あり、湿度は晴が3日続いた日中で44%だったが、後は68～88%と高かった。

地形及び地質

地形構造は広大な侵食平坦面と高峻な山嶺と低凹盆地、それに深い溪谷が平行している。地質構造は複雑で、なおかつ褶曲が緻密で断層が連続している。高原の地表面は平均標高約1,000mあり、西北部はやや高く約1,500から2,000mある。高原の西は雲南高原につながり、雲貴高原を構成している。高原は広く石灰岩でおおわれており、カルスト地形が発達している。標高600mから800m以上では成帯性土壌は黄色土、以下の河谷・盆地では赤色土が分布している。地表面の多くは石灰岩が露出しており、レンジナ（黒色石灰岩土、腐食炭酸塩土壌）及び黄色レンジナである。レンジナは有機質含量が高く、中性ないしアルカリ性（PH6.5～8.0）を示し、土中の酸化鉄の影響を受けて露出した表土は黄色くなっている。

カルスト地形の特徴として漏水し易く、岩の表面からの熱吸収及び発散が早いいため昼夜の温度差が大きくなり、土壌は乾燥が激しい。そのため禾本科を中心とした草原のため植生も貧弱で、二次林もほとんど見られない。これはこの地をも含めて中国の山地では、1958年からの改革路線「大躍進」のもと、製鉄のための燃料として多くの木が切られてきたことと併せて考えられる。

植生

中国における自然区画は華中区南部、貴州高原小区に属し、植物区は汎北極植物区の中国—日本森林植物亜区に属し、鎮・黔・桂地区と呼ばれる。

植生は照葉樹林帯を構成している石灰岩性の落葉広葉樹・常緑広葉樹の混交林を主としている。成帯性植生はおもにシイ属（栲属 *Castanopsis*）のオオバシイ（大葉栲 *C. megaphylla*）、クリカシの一種（高山栲 *C. delavayi*, 元江栲 *C. orthacantha*）などと、アラカシ（青岡櫟 *Cyclobalanopsis glauca*）を主とする湿性常緑広葉樹林である。高木の上層は落葉広葉樹であるニレ科（榆科 *Ulmaceae*）のアキニレ（榔榆 *Ulmus parviflorus*）、エノキ（朴 *Celtis sinensis*）、村の“御神木”として、また“憩いの樹”としてどの村にもよく見かけられるクワ科（桑科 *Moraceae*）のオオバナアコウ（黄栌樹 *Ficus lacor*）、クルミ科（胡桃科 *Juglandaceae*）のノグルミ（化香 *Platycarya strobilacea*）、フジバシデ（黄杞 *Engelhardtia roxburghiana*）、マメ科

(豆科 *Leguminosae*) のキササゲ (炮筒樹 *Catalpa bignoniodes*), オオバネム (山槐 *Albizia kalkora*), カバノキ科 (樺木科 *Betulaceae*) のヤマシデ (鵝耳櫪 *Carpinus turczaninowii*) などの好石灰性の樹種である。高木下層はアラカシ, クスノキ (樟 *Cinnamomum camphora*), トウネズミモチ (女貞 *Ligustrum lucidum*) などの常緑広葉樹で構成されている。これらが破壊されたところにはウンナンアカマツ (雲南松 *Pinus yunnanensis*), カタバシイ (苦椎諸 *Castanopsis sclerophylla*), フウ (楓香 *Liquidambar formosana*), コナラ属 (櫟属 *Quercus*) などが, 更に破壊が進むとトダシバ (野古草 *Arundinella hirta*), メガルガヤ (黄背草 *Themeda triandra*), ススキ (芒 *Miscanthus sinensis*), チガヤ (白茅 *Imperata cylindrica*) などの草丈の高い草地となっている。石灰岩地域ではシダレイトスギ (柏木 *Cupressus funebris*) の疎林に, 好石灰岩性の低木であるナガバモミジイチゴ (縣鈎子 *Rubus palmatus*), トウエンイバラ (小果薔薇 *Rosa cymosa*), タカネバラ (刺梨 *Rosa roxburghii*), ピラカンサ (火棘 *Pyracantha fortuneana*), タチバナモドキ (小叶栒子 *Cotoneaster microphyllus*) などのトゲ低木林や, 林床にはウルシ科 (漆樹科 *Anacardiaceae*) のヌルデ (塩膚木 *Rhus chinensis*), カヤツリグサ科 (莎草科 *Cyperaceae*) のスゲ属 (苔属 *Carex* spp.) などが多くみられる。斜面は中性及び乾性のイネ科 (禾本科 *Graminae*) のカモガヤ (鴨茅 *Dactylis glomerata*), スズメガヤ (画眉草 *Eragrostis* spp) などで構成されている。農家の周辺や道ばたにおける雑草群落は, 根茎を利用するドクダミ (魚腥草 *Houttuynia*) のほか, オオバコ (車前 *Plantago asiatica*), ハハコグサ (鼠麴草属 *Gnaphalium* spp.), ヘビイチゴ (蛇莓 *Duchesnea indica*), ヨモギ (蒿属 *Artemisia* sp), イタドリ (虎杖 *Polygonum cuspidatum*) など日本の郊外にも普通にみられる種がほとんどであった。

森林被覆率は貴州省全体で14.5%ある。貴州省の東部では30%を越える地域もあるが, 興義市の南部と册亨県で12~13%, 他の地域では5~10%以下と低い。

興義市, 興仁県, 貞豊県の海拔1,200~1,800m では年平均気温約16℃, 年積温 (1年のうち日平均気温10℃以上の継続期間内の日平均気温の総和) は4,500~5,500℃ (興仁で4,588℃), 年降雨量1,200mm以上と亜熱帯北部に分類される。上記地域の海拔800~1,200mと册亨県では年平均気温18~20℃, 年積温6,000~7,000℃, 無霜期間 (日平均気温10℃以上の継続期間) は243日あり, 作付け方式は水田および畑作の1年2作である。標高600m以下では水稻2期作の植え付けができる。

主要作物は平地ではイネ (水粳稻 *Oryza sativa*), 山地ではトウモロコシ (玉米 *Zea mays*) を, 裏作にはコムギ (小麦 *Triticum aestivum*) やアブラナ (油菜 *Brassica campestris*) が主につくられている。冬のコムギやアブラナの成熟前にトウモロコシを, トウモロコシの成熟前にはサツマイモ (甘薯 *Ipomoea batatas*) やダイズ (大豆 *Glycine max*), ラッカセイ (花生 *Arachis hypogaea*) などを間に植える間作栽培を行っている。栽培野菜については別項でのべられるが, 野菜の大規模栽培はほとんど見られず, 自家消費用の家庭菜園が中心であった。亜熱帯, 温帯作物であるサトウキビ (甘蔗 *Saccharum officinarum*), ミカン (柑橘 *Citrus* spp), ナツメ (棗樹 *Zizyphus jujuba* var. *inermis*), チャンチン (香椿 *Toona sinensis*), シナアブラギリ (油桐 *Aleurites fordii*), ユチャ (油茶 *Camellia oleifera*), チャ (茶 *Camellia sinensis*), ユーカリ (桉樹 *Eucalyptus* spp), タバコ (煙草 *Nicotiana tabacum*) などの経済 (換金) 作物が多くみられた。

動物相

中国における動物地理区画は東洋界・季節風区南部の華中区（中北亜熱帯湿潤地区）に属し、西部山地高原亜区と呼ばれている。

調査地域は二次灌木林と草地斜面が耕作地に交錯して混在するため、動物は人類の経済活動に大きく影響を受けて、非常に貧弱である。地上性の小獣類も典型的な森林性の動物は少なく、コミミセンザンコウ（穿山甲 *Mams pentadactyla*）、ムササビ（鼠吾鼠 *Petaurista* sp.）、ハクビシン（花面狸 *Paguma larvata*）がわずかに残っている。耕作地の開発にともなうできた二次性の灌木林や草地でみられるイワヤマリス（岩松鼠 *Sciurotamias davidianus*）、キョン（小鹿 *Muntiacus reevesi*）、キバノロ（獐 *Hydropotes inermis*）、チュウゴクノウサギ（短耳兔 *Lepus sinensis*）なども最近まで見られたが、現在はほとんど見られない。最近では農耕地域や伐採跡地にみられるセスジネズミ（黒線姫鼠 *Apodemus agrarius*）、キバラネズミ（黄胸鼠 *Rattus flavipectus*）、ドブネズミ（褐家鼠 *R. norvegicus*）、ハツカネズミ（小家鼠 *Mus musculus*）などが優占種となり、殺鼠剤が市場で盛んに売られていた。竹藪などに穴を掘ってすんでいるチュウゴクタケネズミ（中華竹鼠 *Rhizomys sinensis*）が册亨県の名物料理としてよく出された。

キツネ（狐 *Vulpes vulpes*）、イタチ（黄鼬 *Mustela sibirica*）、キエリテン（黄喉貂 *Martes flavigula*）、イタチアナグマ（鼬獾 *Melogale moschata*）などが補食者として現れる。また、貴重な動物としてしられるインドジャコウネコ（小霊猫 *Viverra zibethica*）、ハクビシン、コミミセンザンコウの毛皮やニホンジカ（梅花鹿 *Cervus nippon*）の角が漢方薬と一緒に市場で売られていた。

鳥類の組成も人間の活動と密接な農耕環境に生息するハシブトガラス（大嗜鳥鴉 *Corvus macrorhynchus*）、ハクセキレイ（白鶴鳥 *Motacilla alba*）、ダルマエナガ（綜頭雅雀 *Paradoxornis webbiana*）、キバラクロガシラ（黄殿鳥 *Pycnonotus xanthorrhous*）、カノコバト（珠頸斑鳩 *Streptopelia chinensis*）、キジ（環頸雉 *Phasianus colchicus*）などがよくみられる。者相の市場では食用として七面鳥に似たノガン（大鴉 *Ots tarda*）が売られていた。

野味の調査のためにこの地域にいたると思われる野生生物の絵を持っていき、聞き取りの調査を行った。結果はほとんどの種がいたると答えられたが、信憑性は薄いと思われる。両性・爬虫類は調査期間中1度も出会えなかったが、酒に漬かったトッケイヤモリ（蛤蚧 *Gekko gekko*）とマルオアマガサ（金環蛇 *Bungarus fasciatus*）、アカマダラ（赤鏈蛇 *Dinodon rufozonatum*）、アジアコブラ（眼鏡蛇 *Naja naja*）などが売られていた。しかし、カエルやヘビは食用になっているのが少ないため、種の確認は正確にはできないがサンショウウオ（小鯢 *Hynobius* spp.）、チュウゴクオオサンショウウオ（大鯢 *Megalobatrachus davidianus*）、トノサマガエル（青蛙 *Rana nigromaculata*）、トラフガエル（虎斑蛙 *R. tigrina*）、ヒキガエル（大蟾蜍 *Bufo bufo*）、オオアタマガメ（平胸亀 *Platysternon megacephalum*）、クサガメ（烏龜 *Chinemys reevesii*）、キョクトウスッポン（鰲 *Trionyx sinensis*）、キタカナヘビ（北草蜥 *Takydromus septentrionalis*）、コウライジムグリ（紅点錦蛇 *Elaphe rufodorsata*）、ヤマカガシ（虎斑游蛇 *Natrix tigrina*）などが生息しているようである。

魚貝類も河川や池ではほとんど見られず、釣りをしている光景も非常に少なかった。それゆえ魚種の確認も市場で売られているものに頼らざるをえないが、市場ではタウナギ（黄鮟 *Monopterus alba*）と養殖魚であるソウギョ（草魚 *Ctenopharyngodon idellus*）、コイ（鯉魚 *Cyprinus carpio*）が主で、フナ（鯽 *Carassius auratus*）、ナマズ（鮎魚 *Silurus asotus*）、ドジョウ（泥鰌 *Misgurnus anguillicaudatus*）、ライギョ（斑鱧 *Channa maculata*）、ギギ科（鱮科

Bagridae) やボラ科 (鯰科 *Mugilidae*) の一種、養殖魚と思われるテラピア (吳郭魚 *Tilapia morsambica*) などが売られていた。そのほかにタイワンキンギョ (叉尾闘魚 *Macropodus opercularis*)、ハゼ科 (鰕虎魚科 *Gobidae*) の仲間やオイカワ (寛鰭鰻 *Zacco platypus*)、モツゴ (麦穂魚 *Pseudorasbora parva*)、ヒナモロコ (似細鯽 *Aphyocypris normalis*) などのコイ科 (鯉科 *Cyprinidae*) の稚魚の干したものや、貝ではタニシ (田螺 *Cipangopaludina chinensis*) の剥き身などがみられた。

昆虫相は旧北区と東洋区の境界に当たり、両区の昆虫がみられるために豊富な昆虫相を持っていると思われるが、耕作地の開発などにより非常に貧弱である。調査地域で観察された昆虫類は亜熱帯から温帯にかけての昆虫相を示し、西南日本の昆虫相と非常によく似ている。たとえば、アオスジアゲハ (藍帯青風蝶 *Graphium sarpedon*)、モンキアゲハ (紅縁風蝶 *Papilio helenus*)、ナガサキアゲハ (多型藍風蝶 *P. memnon*)、ナミアゲハ (柑橘風蝶 *P. xuthus*)、モンシロチョウ (菜粉蝶 *Pieris rapae*)、キチョウ (黄粉蝶 *Cotias erate*) などの日本の郊外でごく普通にみられる蝶が見られた。標高が600~800mと低い平岸や冊亭ではシロオビアゲハ (玉帯風蝶 *Papilio polytes*)、スジグロカバマダラ (粗烏詠槽斑蝶 *Salatula genutia*)、タテハモドキ (孔雀眼峡蝶 *Precis almana*)、アオタテハモドキ (翠藍眼峡蝶 *P. orithya*)、リュウキュウアサギマダラ (錫蘭青斑蝶 *Radena similis*)、ルリマダラ属 (紫斑蝶 *Euploea* sp.)、ハレギチョウ (青似斑峡蝶 *Cethosia cyane*)、シロオビヒカゲ (玉帯竹眼蝶 *Lethe europa*)、ウスイロコノマ (普通昏眼蝶 *Melanitis leda*) などの琉球列島から東南アジアにかけてみられる東洋区の蝶などが多く確認された。

昆虫食も日本でみられるイナゴ (シナイナゴ 中華稻蝗 *Oxya chinensis* ハネナガイナゴの一種 長翅稻蝗 *O. velox*)、スズメバチ (スズメバチの一種 墨胸胡蜂 *Vespa mgrnthorax*、クロスズメバチ 曷黄胡蜂 *Vespula flaviceps lewisu*) の幼虫であるハチノコ、カイコ (家蠶 *Bombyx mori*) の蛹などがある。しかし、イナゴの中にはトノサマバッタ (飛蝗 *Locusta migratoria*) やシヨウリヨウバッタ (中華蚱蜢 *Acrida cinerea*) などが混じっており、イナゴだけのものは少し高く売られている。珍しいものにはヘビトンボ (剛送虫 ヘビトンボ属の1種 *Protohermes* sp., カブトヘビトンボ属の1種 *Neoneuromus* sp., モンヘビトンボ属の1種 *Neochauliodes* sp.) の幼虫の空揚げやトンボ類 (遮臉虫 アカネ属 *Sympetrum* spp.) の串焼き、カメムシ科 (蝽科 イネクロカメムシ *Scotinophara lurida*)、コオイムシ (青棚巴 *Diplonychus japonicus*) の香辛料などがみられた。

なお、中国における動・植物の持ち出しはきびしく制限されているため、特に昆虫を含む動物は一切の持ち出しを禁じているために現地での観察で行った。そのため大型の肉眼で同定できるものに限られたため、昆虫は蝶類などの比較的分かりやすいものに限って調べた。

要 約

1. 調査地域は中国西南部の雲貴高原の東部に位置し、標高が227m~2,207mと高峻な山嶺と低凹盆地に深い溪谷が平行する複雑な地形の熱帯山地性高原にある。
2. 高原は広く石灰岩でおおわれ、カルスト地形が主な地貌特徴として発達している。土壌が乾燥しているため、禾本科の草原であるため植生も貧弱である。
3. 植生は石灰岩性の落葉広葉樹・常緑広葉樹の混交林を主としている。成帯性植生はおもにシイの1種、アラカシを主とする湿性常緑広葉樹林である。アキニレ、エノキ、オオハノアコウ、ノグルミ、キササゲなどの落葉広葉樹の高木がわずかながら見られるが、農地などによる

破壊のためトダシバ、メガルガヤ、ススキ、チガヤなどの草丈の高い草地となっている。

3. 農業は水田および畑作の1年2作である。主要作物は平地ではイネ、山地ではトウモロコシを、裏作にはコムギやアブラナが主につくられている。そのほかサツマイモ、ダイズ、ラッカセイなどの栽培野菜やサトウキビ、ミカン、チャンチン、チャ、タバコなどの換金作物がみられた。

4. 動物相はわずかながら残された二次灌木林と草地斜面が耕作地に混在しているため、非常に貧弱である。ほ乳動物は貴重な動物であるインドジャコウネコ、ハクビシン、コミミセンザンコウ、ニホンジカなどが市場で売られているが、実際にみられるものは農耕地域や伐採跡地などでみられるセスジネズミ、キバラネズミ、ドブネズミ、ハツカネズミなどである。

同様に鳥類もハシブトガラス、ハクセキレイなどの農地でも見られる種であった。

両性・爬虫類や魚貝類なども自然の状態ではほとんど見られず、市場などに売られているもので種名の確認を行った。スッポン、ソウギョ、コイなどの養殖もののほかは、タウナギ、ナマズ、フナやコイ科、ハゼ科の稚魚と非常に貧弱であった。

5. 昆虫相は旧北区と東洋区の境界であるが、種類数・個体数ともに貧弱であった。西南日本の昆虫相とよく似ており、アオスジアゲハ、モンキアゲハ、ナミアゲハ、モンシロチョウ、キチョウなど日本の郊外でごく普通にみられる蝶が観察された。標高800m以下の低いところでは、シロオビアゲハ、スジグロカバマダラ、アオタテハモドキ、ハレギチョウ、ウスイロコノマなどの琉球列島から東南アジアにかけてみられる東洋区の蝶なども見られた。

6. 昆虫食も日本でみられるイナゴ、ハチノコ、カイコなどがみられるが、必ずしも種は特定されていない。変わったものにはヘビトンボの幼虫の空揚げやトンボの成虫の串焼き、カメムシ、コオイムシの香辛料などがあつた。

参 考 文 献

- 中国科学院編：中国の動物地理，366pp 日中出版，1981。
中国科学院：中国自然地理，植物地理，上129pp，下318pp，科学出版社，1985，1988。
中国農業年鑑編纂委員会：中国農業年鑑，1992年度版。624pp 貴州出版社，1993。
呉至康等編著：貴州鳥類志，482pp 貴州人民出版社，1986。
貴州省統計局：貴州統計年鑑，575pp 中国統計出版社，1992。
国家統計局編：中国統計年鑑，881pp 中国統計出版社，1992。
南川幸：照葉樹林文化の基盤をなす自然環境Ⅰ～Ⅳ，名古屋女子大学紀要，36～39(家・自)，1990～1993。
任美鏐編著（阿部治平，駒井正一訳）：中国の自然地理，376pp 東京大学出版会，1986。
黄威兼，屠玉麟，揚龍編著：貴州植被，502pp 貴州人民出版社，1988。
譚邦傑編著：哺乳動物分類名録，726pp 中国医薬科技出版，1992。
李傳隆，朱宝雲：中国蝶類図譜，152pp 上海遠東出版社，1992。
西北師範学院地理系主編：中国自然地理図集，200pp 地図出版社
鄭慈英主編：珠江魚類志，438pp 科学出版社，1989。
趙修復編著：中国春蜓分類，486pp 福建科学技術出版，1990。

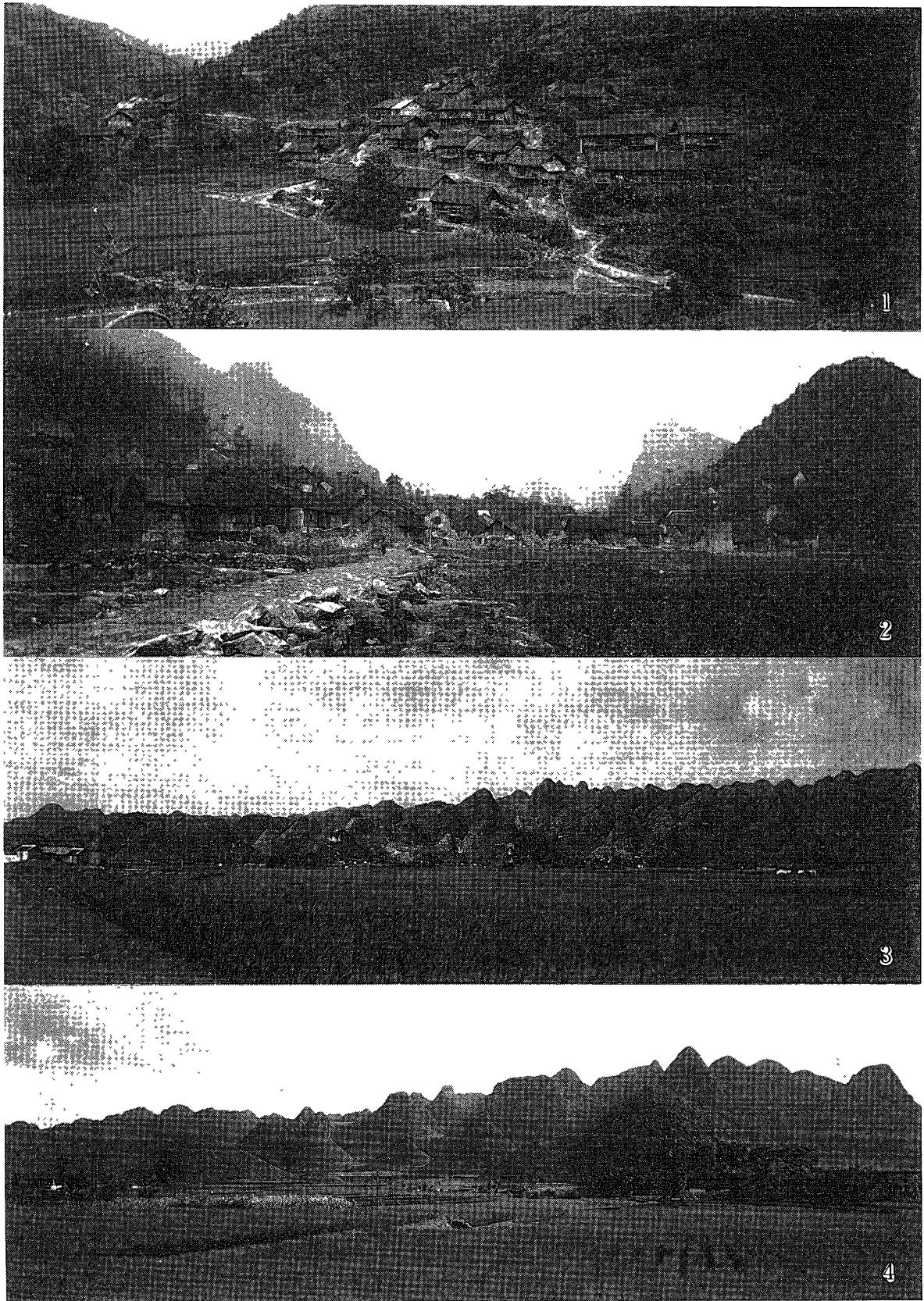


図3 調査地概況

1. 册亨県板用寨 2. 貞豊県岩魚寨 3. 4 興義市郊外

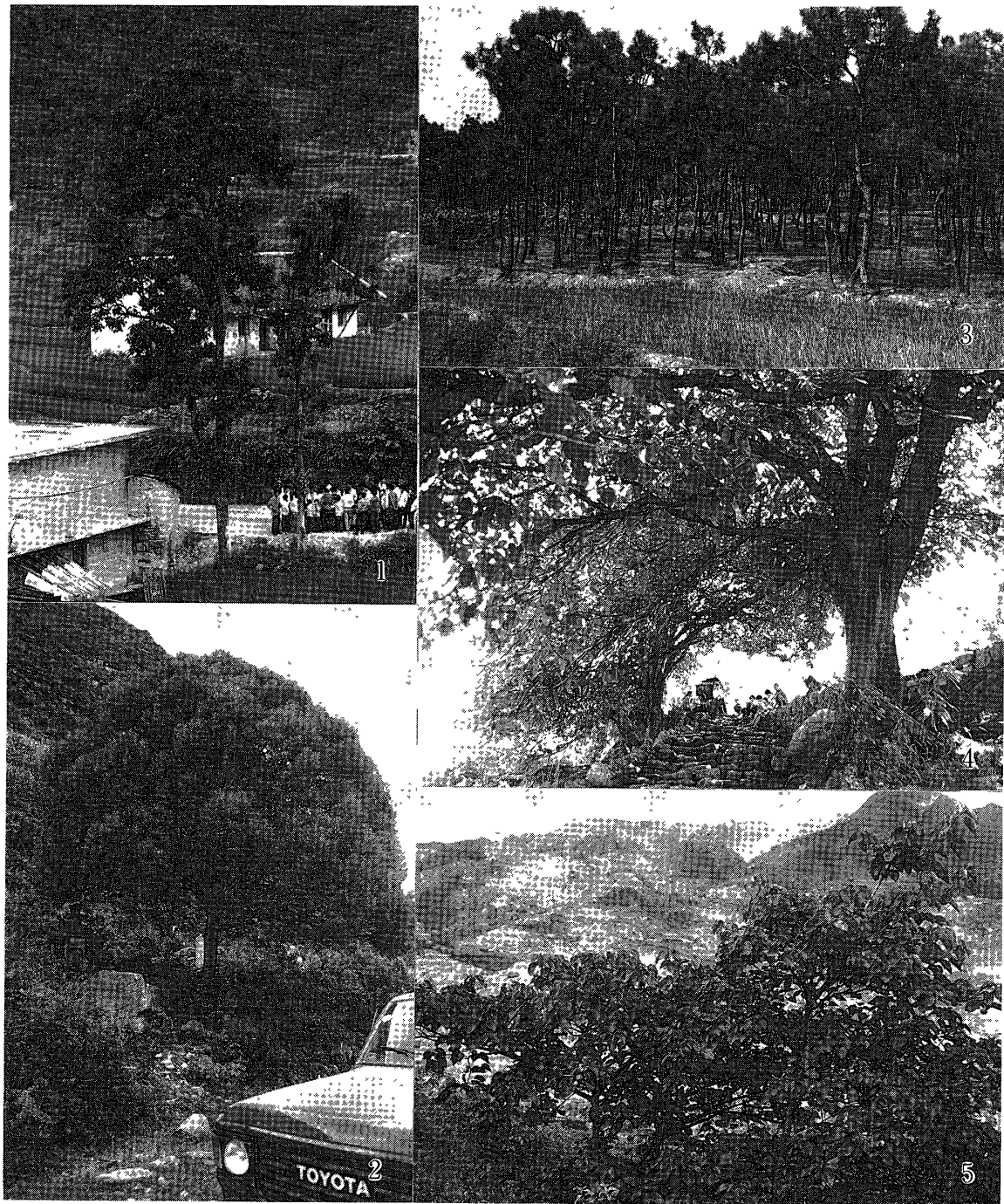


図4 調査地植生（高木）

1. キササゲ（册亨県板用寨）
2. クリカシの一種（册亨県威旁寨）
3. ウンナンマツ（興義市緑化寨）
4. オオバノアコウ（興義市納灰寨）
5. アブラギリ（册亨県羊腸寨）

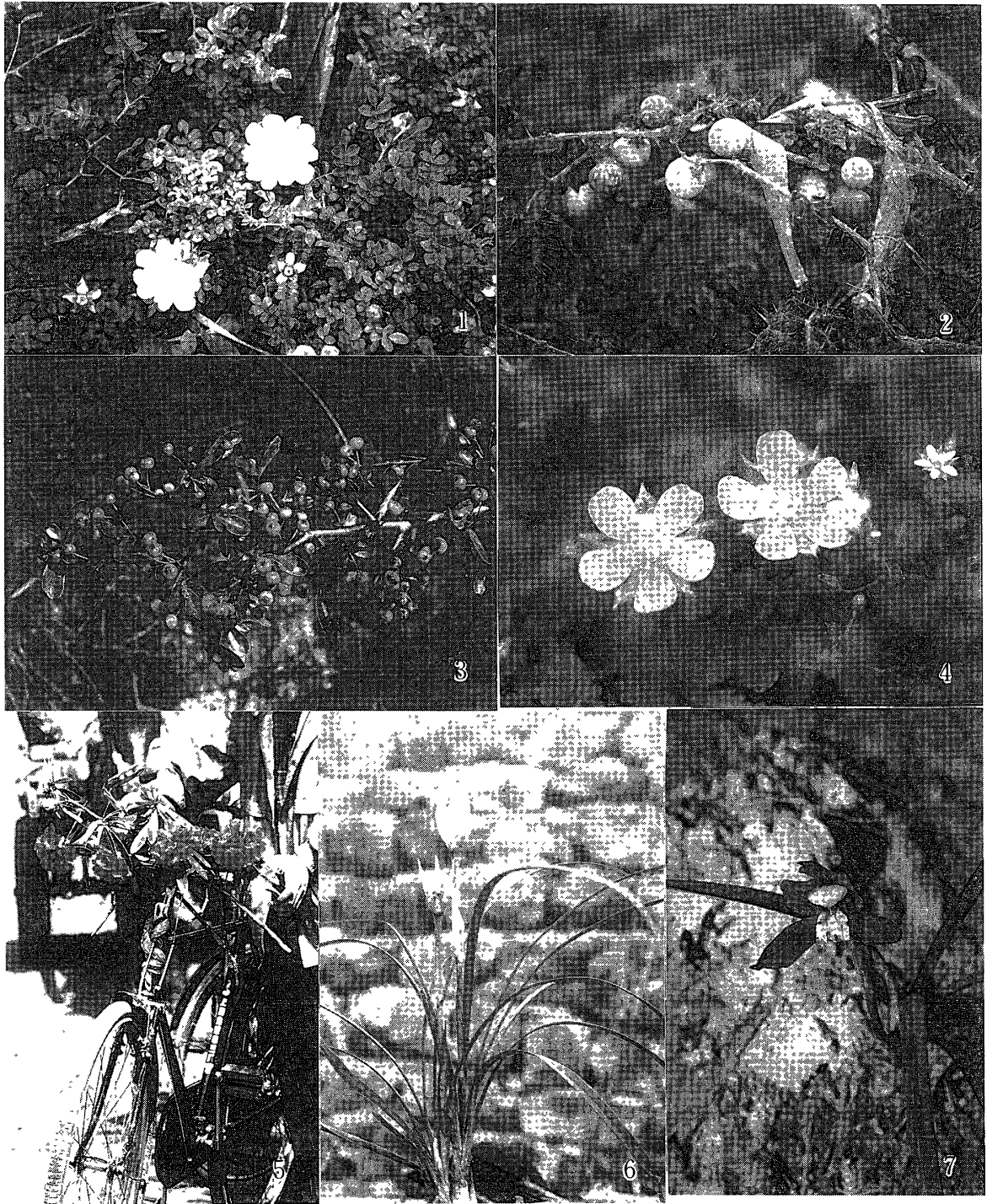


図5 調査地でみられた植物

- | | | | |
|----------|-----------|----------|-------------|
| 1. タカネバラ | 2. キチガイナス | 3. ピラカンサ | 4. ヘビイチゴの仲間 |
| 5. シャクナゲ | 6. ピアナン春蘭 | 7. 雪蘭 | |

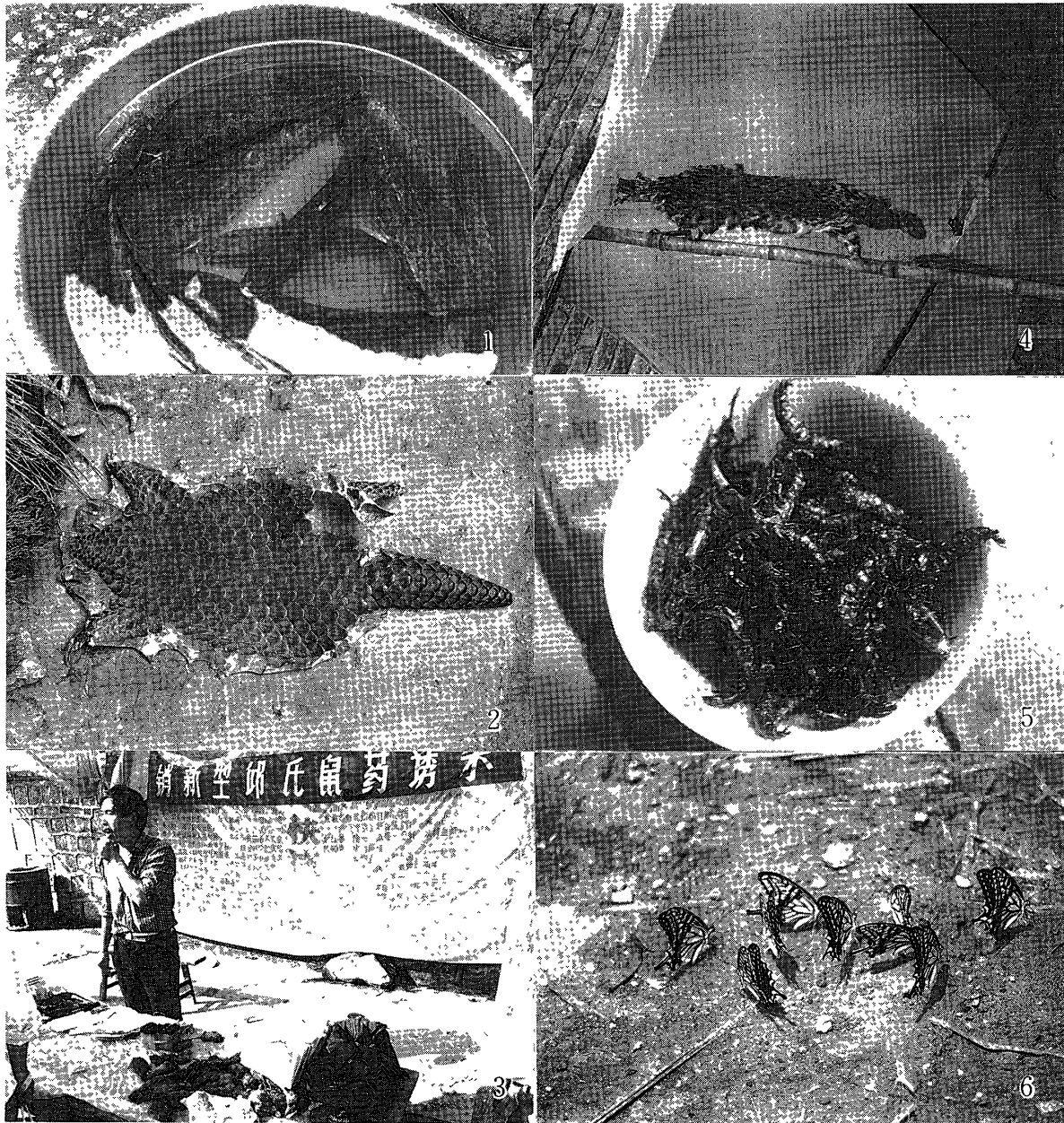


図6 調査地でみられた動物

1. カムルチー 2. コミミセンザンコウ 3. 殺鼠剤売り
4. インドジャコウネコ 5. ヘビトンボの空揚げ 6. アゲハチョウの吸水